
機動戦士ガンダム00 DESTINY外伝 『義翼の鳥』

ミーティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム00 DESTINY外伝 『義翼の鳥』

【Nコード】

N4515X

【作者名】

ミーティ

【あらすじ】

これは、『灰色の運命』（00本編のセカンドステージ）の5年前、戦争根絶を掲げ、武力介入を行うソレスタルビーイング（CB）に立ち向かったある一人のフラッグファイターの物語である。

プロローグ

海上

ユニオン軍艦

今、一人のパイロットスーツ姿のユニオン軍兵士が飛行形態のフラッグの前に立った。

「フツ、『あの人』に一步近付いたか…」

その兵士はフラッグをいとおしそうに触った。

その兵士の名は『飛鳥龍義』。

年齢は18にして、少尉の階級を持つ、類いまれなる才能を持つ『フラッグファイター』だ。

龍義「大切な者を守る為の力、俺はそれを以てこの空を飛ぶ。このフラッグと共に。」

龍義は『義手』である右手を空に向け、その手を広げ、そして、握り締めた。

因みに、『あの人』とは、無論グラハム・エーカーのことだ。

グラハムとはかつて幾度か模擬戦を行い、龍義は惜しい所で負けているのだ。

龍義「『ミュ』、俺は親父と叔父が共に飛んだこの空を飛ぶ。」

ミユとは、龍義の従妹で、名字は玲で、年は10。

龍義の父親と心優の父親は兄弟であり、戦友として空を飛んでいた。因みに叔父の名字が父親とは違う理由は、経済的な理由から、叔父が養子に出されたことがその理由である。

因みに、ミユの母親はフランス人である。

だが、6年前に故郷の日本で自動車事故に合い、龍義の両親とミユの両親は共に死亡し、龍義も右腕を肩から先を失い、2年前にユニオン軍に入るまで、ずっと左腕一本で心優と共に生きてきた。

そのため、利き手は実質的には左利きになっている。

それはパーソナルマークにも現れており、右の翼が機械的なデザインになっている。

龍義「…さて、行くとするか。」

龍義がそう呟いた直後、スクランブルのサイレンが鳴った。

龍義には人より『勘』が鋭く、その鋭い勘と類似希なる才能、そして涙ぐましい努力によってフラッグファイターの称号を勝ち取ったのだ。

龍義「相手は？」

龍義はフラッグのコクピットに乗り、通信を行った。

『ヘリオンが3機です。』

龍義「ヘリオン？ AEUのばら蒔きか…」

『発進どうぞ！』

龍義「飛鳥龍義、フラッグ出る！」

龍義のフラッグは高らかに空に舞い上がり、先行していたリアルド

部隊を追い抜いた。

龍義「あーあー、その所属不明機、ここはユニオンの領域だ。今すぐ引き返せ。」

龍義は3機のヘリオンにユニオン領域からの撤退を要求した。

だが、3機のヘリオンからの返答はなく、その代わりに

龍義「再度通告する。今すぐ引きかえ　　ッ!？」

龍義の『勘』が危険を感知し、操縦桿を名一杯動かした。

フラッグがいた所にヘリオンの攻撃が通過した。

龍義「…それが返答か。此方、ヘリオンの攻撃を受けた。発砲許可を。」

3機のヘリオンは散開し、まるで肉食獣の様にフラッグに詰め寄った。

龍義「取り囲まれた?!　だが、その程度ではこのフラッグを落とせはしない!」

龍義は操縦桿を押し込み、フラッグのバーニアが火を噴き、ヘリオンの檻から脱出した。

ピュッ!

『発砲許可が降りました。』

龍義「その言葉を待っていた!」

龍義はそう言い、フラッグは反転してヘリオンに迫った。

ガシヤッ！

「!？」

ヘリオンのパイロットは驚愕の光景を目の当たりにした。目の前のフラッグが変形したのだ。

龍義「ぐくっ…！　これが、グラハム・マニユーバ！」

変形したフラッグは変形した反動を使い、1機のヘリオンの上を取り、バーニアを撃ち抜いた。

龍義「次！」

フラッグは更にもう1機のヘリオンのウイングを全て撃ち抜いた。

龍義「ぬるいな。」

「くっ…クソオ…！」

残ったもう1機のヘリオンはフラッグに突撃した。

龍義「その程度！」

フラッグは空いてる右手にソニックブレードを持ち、刃をプラズマソードにし、ヘリオンの右半身を両断した。

「うはっwwwwww　すげえwwwwww」

「あいつ18だよな?!　な?!」

「ハハツ！ こりゃ楽しみだな！」

「おい！ さつさと回収しろ！ 生命反応あるぞ！」

龍義「何やってんですか？」

フラッグは右半身を両断したヘリオンを海面を引き摺るようにして運んでいた。

「うえ W W W W W エゲツねえ W W W W W」

「容赦ねえなおい！」

「うはつ W W W W W あれやられてみてえ W W W W W」

「ドMかよお前?!」

「嘘だし W W W W W」

「嘘かよ！」

「だからさつさと運ぶぞ貴様ら!!」

「コイツうぜえ W W W W W」

「撃ち殺すぞ貴様!!」

「階級俺より下のクセに W W W W W」

「ぐっ!!」

龍義「…ハア…」

龍義は彼らの言い合いに溜め息を吐いた。

その後、3機のヘリオンは、龍義の指摘通り、A E Uが『ばら蒔いていた』機体であった為、A E Uは非難を受けたのはいうまでもない。

夜

ユニオン基地

龍義は自室でグラハムと通信をしていた。

グラハム『話は聞いていたが、かなり腕を上げたようだな。』

龍義「いえいえ、中尉には敵いませんよ。」

グラハム「フツ、その腕ならMSWARDに入れるぞ?」

龍義「…考えときます。」

グラハム「そうか、次の機会があれば手合わせを願おう。」

龍義「いえ、それは普通逆……はい。」

グラハム「そろそろ私はこれで失礼する!」

グラハムは通信を切った。

龍義「…ハア……中尉は疲れる……」

龍義は本日二度目の溜め息を吐き、外に出た。

龍義「……」

龍義は風を感じながら首にあるペンダントを開いた。

そこには、赤毛の少女の写真があった。

その少女が龍義の従妹のミュウなのだ。

龍義「ミュウ……」

龍義は日本の施設にいるミュウが見てるだろっ月を見上げた。
これは世界が『ガンダム』を知る3ヶ月前の話である。

プロローグ（後書き）

遂に始めちゃった…始めちゃったぞ…！
これから、龍義がどうC Bやグラハム達と絡むのか、楽しみにして
ください

飛鳥龍義の紹介

飛鳥あすか
龍義りゅうぎ

性別、男

誕生日、8月26日

年齢、18歳（但し、プロローグはCBが武力介入を始めるその3ヶ月前の為、『世界がガンダムを知る時』には19歳になっている。

髪の色、黒

髪型、少し癖つ毛のあるショートヘア

瞳の色、鳶色

身長、178?

出身地、日本

階級、少尉

ユニオン軍に所属するMSパイロットであり、グラハムに次ぐ実力を持つと言われているフラッグファイターである。

非常に勘が鋭く、自分の周囲に起こる事や他人が考えている事等がある程度判るらしい。
独特の感性や高い洞察力を持っているのも、その鋭い勘によるものである。

私服は和服に洋服の要素を組み合わせた服（本人曰く、『洋和服』）を着ている。

たいへんな努力家であり、その鋭い勘と合わさり、軍に入って僅か1年でフラッグファイトの称号を手に入れた。

夢は父親と叔父と共に空を飛ぶ事であり、元々ユニオン軍には入る予定だった。

だが、6年前の事故により、両親と叔父は死亡し、龍義自身も右腕を肩から先を失った。

夢を失った龍義だが、従妹のミユを守りたい為に前倒してユニオン軍に入ったため、学校は所謂中卒だが、独自で高校の勉強をしていた。

因みに、成績は全科目で10位以上をキープしていた。

軍に入るまでは義手を拒み、左腕一本で何でもこなしてきたため、実質的な左利きになっている。

それはパーソナルマークにも現れており、パーソナルマークは右の翼が機械になっている鳥である。

義手はEカーボン製の骨と人工皮膚、機械の筋肉、生体パーツである人工神経で構成している。

人工神経は人工筋肉を正確に動かす為にあり、龍義の神経と接続する為、義手の接続及び取り外し、更に人工神経の損傷等の際には痛みを感じる。

人工神経と人工筋肉の維持とメンテナンスにはナノマシンが欠かせないが、ナノマシンを貯めておくタンクは龍義の右肩の義手の接続部内部にある為、ナノマシンの補充には義手を取り外す必要がある、取り付けや取り外しの際には、人工神経の切断や接続による痛みが走る。

龍義はその痛みを感じる度に『事故』の事を思い出している。

義手取り外しと取り付けがパイロットスーツを着ていても円滑に出来るように、パイロットスーツは特注品である。

第1話 ソレスタルビーイング(前書き)

グラハムからA E Uの新型MSのデモンストレーションの話聞いた龍義は、日本から来た従妹のミュの為にフラッグでの模擬戦を行うが…

第1話 ソレスタルビーイング

プロローグから3ヶ月後

ユニオン基地

龍義「AEUの新型MSのデモンストレーション？」

19歳になった龍義はこの基地にやって来たグラハムの言葉を言い返した。

グラハム「ああ、そうだ。」

龍義「ですが、MSWARDのエースがそんな所に行っていないんですか？」

グラハム「フツ、無論良くはない。」

龍義「（やっぱりな。……だけど、興味の方が勝るな。）…それは何時ですか？」

グラハム「三日後だ。」

龍義「三日後ですか。それなら問題は…ん？ 三日後って確か、人革連の電力送信10周年パーティーが…あっ！」

グラハム「フツ。」

龍義「AEUはなんでこのタイミングで…？」

グラハム「さあ、だが、急がなければならぬ理由はあるだろうな。」

龍義「……………」

そこで龍義は少し考え

龍義「分かりました。自分も行きます。」

グラハム「フツ、その言葉が聞きたかった。」

グラハムはそう言いながら龍義に紙切れを渡した。

龍義「これは？」

グラハム「集合する日時と場所が書いてある。無くすなよ？」

龍義「はい。」

「飛鳥少尉。」

1人の兵士が龍義に近付いた。

龍義「何だ？」

「面会です。」

龍義「ああ、分かった。」

グラハム「ん？ 面会とは？ 誰か来るのか？」

龍義「ええ、右腕です。」

グラハム「ミュ？ 少尉の妹さんか？」

龍義「従妹です。」

グラハム「そうか、それは失礼したな。」

龍義「いえ、そんな謝ることではありませんよ。」

グラハム「ん、そうか。」

龍義「では、自分はこれで。」

龍義はお辞儀をしてその場から立ち去った。

グラハム「…飛鳥龍義、それでいい。守りたい者を守る為に空を飛

べ。」

グラハムのその呟きは、誰の耳にも届くことなく消えて行った。

ミユ「龍兄！」

ミユは龍義を見付けて呼んだ。

龍義「ああ、ミユ。直接会うのは2ヶ月振りだな。」

龍義はミユの頭を撫でた。

ミユ「えへへ」

龍義「ああ、この前、俺がフラッグに乗れたのは知ってるな？」

ミユ「うん。」

龍義「今回は上と話してお前の為にフラッグを見せようと思う。」

ミユ「え？ 本当？」

龍義「ああ、本当だ。着いてこい。」

龍義は歩き出し、ミユはその後を追うように歩き出した。

龍義「……………！」

龍義は人混みの中で不敵な笑みを浮かべているグラハムと目が合った。

龍義「(…何か一悶着あるな…)」

その龍義の考えは的中する事になる。

ミユ「おお〜！」

ミユは飛行形態で飛ぶフラッグを見て、歓声を上げた。
因みに、龍義の提案は模擬戦という形で行われる為、リアルド2機と戦う事になった。

龍義「聞こえるか？」

龍義は2機のリアルドに通信を行った。

『なんだしwwww』

龍義「俺の従妹が見に来ているのは知ってるな？」

『ああ、知ってるぜ？ 別に手加減ならしてやっても』

龍義「『本気で』掛かって来い。」

「えっ？」

「うはっwwww マジッスかwwww」

龍義「言った筈だ。実戦だと思って本気で掛かって来い。」

「いや、なんか付け加えてないか?!」

「うはっwwww 別に良いッスよwwww」

龍義はそこで怒りで燃え上がらせる発言をした。

龍義「フツ、どうせ『勝てっこない』がな。」

「あつ?!」

龍義「おい、掛かって来いよ。『本気でな』。」

「おいテメエ、幾ら階級が上だからって、若造の癖に調子乗るなよ
!?!」

「燃え上がれwwwwww 燃え上がれwwwwww」

「お前が一番邪魔過ぎるわツ!!」

「うはっwwwwww 味方なのにその言われようとかwwwwww
マジウザすwwwwww」

「潰してやる!!」

リアルドはフラッグに攻撃を仕掛けた。

因みに、この会話は全て他には聞こえていない。

「俺だって、フラッグに乗りたいたんだよ!! それをお前が…!!」

「お前怒りつぽいもんなwwwwww 上官にも楯突くからフラッグ
に乗れねえんだよwwwwww バーカwwwwww」

「何だと!? だったら1人で奴を撃ち落としてやる!!」

「ガンバwwwwww」

「墜ちろ!!」

龍義「おっと!」

フラッグはリアルドの攻撃を躲した。

「うはっwwwwww 俺ハブられたしwwwwww しょうがねえw

wwwwww このまま見学すっかwwwwww」

「当たれ!」

龍義「当たるか!」

フラッグはリアルドの攻撃を躲した。

「くっ！ だが！ それはフラッグの性能のお陰だ！」
龍義「だが、幾ら性能が良くても、それを扱うパイロットが無能だと、宝の持ち腐れとなる。」

「なら、フラッグの性能を生かせないまま墜ちろ！」
龍義「あなたも見た筈だ！ 俺の実力を！」

フラッグはリアルドの攻撃を躲しながらMS形態に変形した。

「なっ?!」

龍義「グラハム・マニューバ！」

「ハッ?! しっ…しまっ…?!」

MS形態に変形したフラッグは、リアルドの装甲をペイント弾で赤く染めた。

「や…やられた…?」

「流石だぜwwww」

龍義「次は…」

フラッグは再変形し、もう1機のリアルドに向かった。

「うえwwwwww こっち来たしwwwwww やべwwwwww 勝てる気しねえwwwwww」

それでも、リアルドはフラッグを迎撃しようとした。

ピピッ!

龍義「!」

「うえ?! W W W W」

リアルドはペイント弾で赤く染まった。

「うえ W W W W 何が起きたし W W W W」

龍義「ハッ! あれは!」

龍義はこちらに向かって来る『フラッグ』を見付けた。

ミュ「フラッグがもう1機:~?」

「いや:~フラッグは飛鳥少尉の機体だけだ。」

ミュ「えっ?」

「:~! いや:~まさか:~?!」

ミュ「?」

そして、その乱入したフラッグから、『あの男』の声が聞こえた。

グラハム『余興は終わりだぞ! 飛鳥龍義!』

皆「!?!?」

龍義「やつぱりか:~!」

グラハム「フツ、この前私と模擬戦をしようと思った!」

龍義「あー:~そうでしたね。」

グラハム「では、始めるぞ。」

龍義「(始末書:~とか言ってももう無駄だなこれ:~):~はい。」

こうして、龍義VSグラハムの模擬戦が始まった。

「やれやれ:~グラハムも無茶をするね:~」

ミュ「:~えっと:~?」

「ああ、僕はビリー・カタギリ。」

ミュ「玲ミュです。」

ビリー「ミュちゃん…でいいかな？」

ミュ「はい。」

ビリー「ミュちゃんは どうして此処に？」

ミュ「あ、従兄に会いに来ました。」

ビリー「ふーん、その従兄は何処にいるのかな？」

ミュ「えー…従兄は…」

ミュは上を見上げた。

そこには変形を繰り返しながら模擬戦を行う2機のフラッグがいた。

ビリー「えっ？ もしかして…従兄って飛鳥少尉？」

ミュ「はい。」

ビリー「へえ…そうなのか…」

ビリーも空を見上げ、まるで舞い踊っているかのように空を飛ぶ2機のフラッグを見た。

「…あれも時代か…」

一人のユニオン軍パイロットは2機のフラッグの戦い方を見ながらそう呟いた。

「うはっ W W W W W 俺も後もう少ししたらフラッグ乗れるし W W W W W」

そしてグラハムとは違うベクトルで我が道を行く男が現れた。

ミュ「あ、『鐘時^{かねとき}』さん！」

鐘時「うはっ W W W W W 誰かと思ったらミュちゃんチーッス W W W W W」

WWW 後カタギリさんWWW

ビリー「やあ、坂田少尉。君にもフラッグが配備されるのかい？」

鐘時「龍義がMSWARDに行ったらなWWW

ビリー「…ん？ 飛鳥少尉とは面識があるのかい？」

鐘時「家が隣同士WWW

ビリー「ああ、そういうことか。」

鐘時「そんな事よりさっさと見ようぜWWW

ビリー「ああ、そうだね。」

鐘時達は空を見上げた。

龍義「くっ…！ 流石は中尉！ どうやっても追い詰められる…！」

グラハム「フッ、少尉もやる！ 気を抜けばやられる！」

2機のフラッグは激しいデッドヒート繰り広げていた。

龍義「だが、このままこんな事をしても時間の無駄だ…！なら！」

龍義のフラッグは飛行形態のまま急転回した。

グラハム「何？」

龍義「これなら…！」

グラハム「はっ！」

グラハムが何かに気付いた瞬間、龍義のフラッグがMS形態に変形し、模擬戦用ナイフで斬りかかった。

グラハム「くっ！」

グラハムのフラッグはなんとか龍義のフラッグの攻撃を躲した。

龍義「チツ、これで掠りもしなかったとは……！」

グラハム「後少し気付くのが遅れてたなら確実にやられていた！

やはり腕は上げているようだな！ ならば……！」

グラハムのフラッグもMS形態に変形し、リニアライフルで撃った。

グラハム「此方からもいかせて貰うぞ！」

グラハムのフラッグはリニアライフルで撃ちながら龍義のフラッグに接近した。

龍義「だが……！」

龍義のフラッグはグラハムのフラッグの攻撃を躲した。

グラハム「むっ！」

龍義「これなら……！」

龍義のフラッグはグラハムのフラッグに急接近し、模擬戦用ナイフを突き出した。

グラハム「その程度の攻撃！」

グラハムのフラッグは龍義のフラッグの攻撃を躲した。

龍義「なら、これはどうだ!！」

龍義のフラッグは模擬戦用ナイフを投げた。

グラハム「ッ! (だが、直撃では…ハッ?!)」

グラハムが何かに気付いた瞬間、グラハムのフラッグのリニアライフルに模擬戦用ナイフが突き刺さった。

グラハム「しまっ…?!」

龍義「フツ…!」

グラハム「フツ、流石だな。早く私の部下になって欲しいものだ!」
龍義「当てる!」

龍義のフラッグはリニアライフルでグラハムのフラッグに攻撃した。

カチカチッ

龍義「!?! 弾切れ?!…くっ…! なら!」

龍義のフラッグは模擬戦用ナイフを持ち、グラハムのフラッグに突撃した。

グラハム「そう来るのなら、私もそうしよう!」

グラハムのフラッグも模擬戦用ナイフを持ち、唾競り合いを行った。

グラハム「やはり飛鳥少尉は私をたぎらせてくれる!」

龍義「それは…どうも!！」

龍義のフラッグはグラハムのフラッグを蹴飛ばした。

グラハム「クッ！」

龍義「止めだ！」

龍義のフラッグはグラハムのフラッグ目掛け、模擬戦用ナイフを突き出した。

グラハム「だが！」

グラハムのフラッグは機体を翻し、龍義のフラッグの攻撃を躲した。

龍義「!?!」

グラハム「抱き締めたいな…!!」

グラハムのフラッグは龍義のフラッグに抱き付くようにぶつかり、そのまま地上に落ちた。

ドガアアアアアン…!!!!

ビリー「グラハム!?!」

ミュ「龍兄!!」

鐘時「うえ W W W W W」

砂煙の中から、2機のフラッグが現れた。

ミュ「あっ」

ビリー「これは…!!」

鐘時「うはっ W W W W W すごい W W W W W」

皆は2機のフラッグを見て、驚いた。

2機のフラッグは落下の衝撃で壊れてはいない。

だが、2機のフラッグの模擬戦用ナイフは互いのコクピットに突き立てられていた。

龍義「…やっと引き分けか…」

グラハム「フツ、そうだな。」

グラハムのフラッグは龍義のフラッグから離れた。

龍義「まあ、ここまでできたからには、中尉を超えるしかないですね。」

グラハム「フツ、それは楽しみだな。」

その後、グラハムは始末書を山ほど書かされたのは言つまでもない。

空港

ミュ「龍兄、鐘時さん、またね！」

龍義「ああ。」

鐘時「またなWWWWW」

ミュは飛行機に乗った。

龍義「さてと、俺達も行くか。」

鐘時「俺も日本に帰るわ W W W W W」

龍義「クビ切られるぞ。」

鐘時「冗談だし W W W W W」

龍義「あ、そ。」

龍義達は基地に戻った。

3日後

A E U 軍事演習場

グラハム「各国から取材陣が続々と来てるな。」

龍義「A E U もそれ程までの自信が有ると思いますからね。」

龍義はパンフレットを見ながらそう言った。

龍義「A E U の次世代型 M S、イナクト。テストパイロットは……
ん？ パトリック・コーラサワー……？」

龍義はパイロットの『名字』に注目した。

龍義「（コーラサワーって確か……）」

龍義は『ある人物』を思い出そうとした。

ウウー……

龍義「！」

デモンストレーション開始のサイレンが鳴った。

グラハム「始まるか。」

龍義「いや、中入りましょう。」

グラハム「フツ、そうだな。」

二人は演習場に入り、観客席に向かった。

観客席

龍義「あれが……」

グラハム「ほう……」

龍義とグラハムはデモンストレーションを行うイナクトを見ていた。

龍義「あつ……」

龍義は観客席に座っているビリーを見付けた。

ビリー「MSイナクト……AEU初の太陽エネルギー対応型か。」

どつやらビリーはこちらに気付いていない様子だった。と、そこにグラハムが近付いた。

グラハム「A E Uは軌道エレベーターの開発で遅れをとっている。せめてMSだけでもどうにかしたいのだろう。」

ビリー「おや、良いのかい？ MS W A Dのエースがこんな場所にいて。」

グラハム「フツ、それは龍義にも言われたよ。」

グラハムはビリーの隣に座り、龍義もその隣に座った。

ビリー「飛鳥少尉も…」

龍義「中尉に口説かれましたので。」

ビリー「フツ…しかしA E Uは豪気だよ。人革の10周年記念式典に新型の発表をぶつけて来るんだから。」

グラハム「どう見る？ あの機体を。」

ビリー「どうもこうも…うちのフラッグの猿真似だよ。独創的なのはデザインだけだねえ。」

龍義「それは流石に言い過ぎ…」

コーラサワー「そこ！ 聞こえてっぞ！ 今なんつった！ ええ！？ ああ!?!」

龍義「!」

イナクトからコーラサワーが出てきて、怒鳴り付けた。

グラハム「集音性は高いようだな。」

ビリー「みたいだね。」

龍義「……?」

龍義は不意に空を見上げた。

グラハム「？ どうした？」

龍義「いえ、…なんか、『変な感覚』がしたので。」

グラハム「変な感覚？」

ビリー「なんだい？ それは？」

龍義「…なんか…言い様のない…とてつもなく大きな事が…起こる気がして…」

ビリー「へえ、面白い事を言うね。」

グラハム「飛鳥少尉は勘が鋭いと聞く。なら、その感覚はその勘によるものか？」

龍義「はい。」

グラハム「もし、その勘が当たれば、私の部下としてMSWADに入ってもらおうか。」

ビリー「グラハム？」

龍義「…寧ろ外れて欲しいぐらいですけどね…」

コーラサワー「おいコラ！ 人の話聞いてんのか！？ おい！ 聞いて…」

ピピッ！

コーラサワー「ああ！？ アンノウンが！？ どうしてこんな時っ

…」

ジジッ…

突如通信が切れた。

コーラサワー「ッ！ ああ？」

コーラサワーは上空からこちらに向かってくる『緑色の光を放つ機

体』を見付けた。

ビリー「MS!?! 凄いな…もう1機新型があるなんて…」

グラハム「違うな。あの光…」

龍義「なんだ…? 粒子…?」

そのMSは緩やかにイナクトの前に着地した。

ジジツ…

グラハム「通信が…?」

「皆さん! 誘導に従って避難をお願いします!」

ビリー「味方ではない…何処の機体だ?」

龍義「此方ユニオンの機体でもなければ人革連の機体でもなさそうだ。なら、あれは…」

グラハム「『第4勢力』といった所か。」

龍義「ツ…」

そんな一部を除いた周囲の混乱を他所に、コーラサワーは意気揚々とイナクトに乗った。

コーラサワー「おいおい何処のどいつだあ? ユニオンか? 人革連か? ま、どっちにしても人様の領土に土足で踏み込んだんだ。タダで済むわけねえーよなあ!」

「あの馬鹿、何をする気だ! あの機体にどれだけの開発費を…」

「良いチャンスですよ。これでイナクトの価値は上がる。パトリック・コーラサワーは我が軍のエースではないですか。性格に少々問題はありませんが。」

コーラサワー「貴様、俺が誰だか分かってんのか? AEUのパトリック・コーラサワーだ。模擬戦でも負け知らずのスペシャル様な

んだよお！」

「……………」

コーラサワー「知らねえとは言わせねーぞ！」

イナクトはソニックブレイドを引き出し、刃が高速で振動し、観客席の人々は耳を塞いだ。

「あの馬鹿…！」

龍義「だが、あの細身の機体なら、ソニックブレイドでいける！」

コーラサワー「ええ！？ おい！」

イナクトはそのMSに向けて走り出し、ソニックブレイドを突き出した。

ヴォンツ！

そのMSは右腕の大型実体剣 GNソードを素早く展開させ、イナクトの手を切断した。

ビリー「おお！」

グラハム「なんと！」

龍義「あんな細身の機体があんな大剣を片腕でいとも簡単に?!」

コーラサワー「ツ…！ てめえ…分かってねーだろ…！」

そのMSの攻撃は続いた。

コーラサワー「俺は！」

イナクトは左腕を斬られ

コーラサワー「スペシャルで！」

右腕を斬られ

コーラサワー「2000回で！」

頭部を斬られ

コーラサワー「模擬戦なんだよおおおおおお！……！」

イナクトは倒れた。

「……………」

目の前の光景に静まり返る観客席。

龍義「…何だ…？ あの桃色に輝く剣は…？」

ビリー「まさか…ビーム兵器？！」

龍義「！」

グラハム「失礼。」

グラハムは隣にいた男から双眼鏡を取った。

「な、何を！？」

グラハム「失礼だと言った。」

グラハムは双眼鏡でそのMSを舐めとる様に見た。

そして、そのMSの頭部に、『それ』はあつた。

グラハム「…ガン…ダム……あのMSの名前か？」

ビリー「ガンダム…」

龍義「ガンダム…？」

龍義は懐から小型の望遠鏡を取り出し、そのMSの頭部を見た。

龍義「あつ…」

確かに、そのMSの頭部 正確には額の部分に確りと『GUN DAM』と書かれてあった。

そして、そのMS ガンダムエクシアは背中のコーン状の物から緑色の粒子を出し、空へと飛び立った。

グラハム「またあの光…」

ビリー「推進力もなしでどうして…」

龍義「…まさか…これが『あの感覚』の正体なのか…？」

コーラサワー「奴は何処だ！ 奴は…！ 俺様はパトリック・コーラサワーだ！ 分かったか！？ くっそー…！ 覚えてやがれ…！」

コーラサワーは元気にイナクトから出て、空の彼方にいるエクシアに向かって吠えた。

グラハム「成る程。最新鋭機イナクト、パイロットの安全性は確かだよ。しかし、あのMS…軍備増強路線に行くAEUへの牽制…いや、警告と取るべきか。だとしてもここまでされてAEUが黙っている訳がない。」

龍義「ヘリオンがあのMSに接近している。」

グラハム「ほう。」

龍義「しかし…あの出鱈目な機動力は…まるで全ての空戦MSを嘲笑うかのよう…なっ?!」

ビリー「どうしたんだい？」

龍義「ピラーからMSが…?!」

ビリー「えっ?」

グラハム「恐らく、あの数は規定以上の戦力だな。」

龍義「…あっ! 別の方向から攻撃が…? あれもまさか…」

グラハム「ビーム兵器、だな。」

ビリー「…しかし、ビーム兵器を開発した国は、ユニオンどころか
A E Uや人革連にもない筈だ。」

グラハム「言った筈だ、あれは『第4勢力』だと。」

ビリー「ッ…」

龍義「……………」

龍義とビリーはグラハムが運転する車の中にいた。

ビリー「あのMSがA E Uの戦力を炙り出してるって?」

グラハム「ああ。A E Uが条約で規定されている以上の軍事力を保有していると、世界に知らしめようとしている。これは牽制と警告だよ。」

ビリー「どうして、そんな事を?。」

グラハム「それはあのガンダムとやらのパイロットに聞いてくれ。」

ビリー「ふむ…」

グラハム「しかし、このままA E Uが黙っているとは思えんな。」

龍義「とはいえ、あのガンダムというMSの力は未知数。更にもう何機かいる筈です。」

ビリー「ふむ、それは困ったね。」

龍義「……………」

龍義はただ窓から外を眺めていた。

日本

施設

「ミュちゃん、それを取ってくれるかな？」

ミュ「はい。」

ミュは一緒に住んでいる施設の子達と一緒に朝ごはんを作っていた。

「オレこれ見る！」

「やだ！ ボクこっちがいい！」

男の子達はテレビのリモコンの争奪戦を繰り広げていた。

「うるせえな。ニュースでも見てるガキども。」

中学生ぐらいの男が男の子達からリモコンを取り上げ、ニュースをやってるチャンネルに回した。

「お早うございます。JNNニュースの時間です。」

「まず最初は人類革新連盟の軌道エレベーター天柱の高軌道ステーションで起きた襲撃事件の続報です。日本時間の今日未明、テロリストと思われるMSにより、人革連の高軌道ステーションが襲撃に

「遭いました。」

『グリニッジ標準時午後6時頃、テロリストと思われるMSにより、高軌道ステーションにミサイルが発射されました。しかも正体不明のMSがこれを迎撃、この映像は偶然居合わせたJNNクルーがカメラに収めたものです。』

画面には小さく1機のMS

ガンダムヴァーチェが映っていた。

「何だこのMS…?」

「デブっちょだけどかつけえ!!」

「何処のMSだ!?!」

「んなもん知らねえよ。」

『事件の最新情報です。たった今、JNNにテロを未然に防止したと主張する団体からビデオメッセージが届けられました。彼らが何者なのか、その内容の真偽の程は明らかではありませんが事件との関連性は深いものと思われれます。ノンカットで放送しますのでどうぞご覧下さい。』

そして、世界に『変革を促す』為の演説が始まった。

『地球で生まれ育った全ての人類に報告させて頂きます。私達はソレスタルビーイング（以下CB）：機動兵器ガンダムを所有する私設武装組織です。』

「武装組織…?」

ミュ「CB…?」

ミュはいつの間にかテレビの前にいた。

『私達CBの活動目的は、この世界から戦争行為を根絶する事にあります。私達は自らの利益の為に行動はしません。戦争根絶という

大きな目的の為に私達は立ち上がったのです。只今をもって全ての人類に向けて宣言します。領土、宗教、エネルギー、どのような理由があろうとも私達は全ての戦争行為に対して武力による介入を開始します。戦争を幫助する国、組織、企業なども我々の武力介入の対象となります。私達はCB。この世から戦争を根絶させる為に創設された武装組織です。繰り返します…」

グラハム「フハハハハハ！ これは傑作だ。戦争を無くす為に武力を行使するとは！ CB…存在自体が矛盾している！」

龍義「確かにそうですね。（そうだ。全ての戦争を終わらせる気なら、このCBは、出口の見えない暗闇の中を…血で濡らしながら突き進むのか…だとしたら…）」

龍義は誰の鼓膜にも響かない程の小さな声でこう呟いた。

龍義「…哀れ…だな…」

第1話 ソレスタルビーイング（後書き）

この義翼のサブタイトルは、基本的には『この回に入る本編のサブタイトル』の為、複数のサブタイトルが入ってる事がありますが、中には変更するサブタイトルもあります。

例：変更前、ガンダムマイスター 変更後、ガンダム

玲ミュの紹介

玲 ミュ(れい みゆ)

性別、女

誕生日、12月16日

年齢、10〜11歳

髪の色、赤

髪型、腰まで伸ばした少し癖っ毛のあるロングヘア

瞳の色、アメジスト

出身地、日本

身長、152cm

龍義の従妹である。

明るく活発な性格だが、6年前の事故で両親を亡くした時は余りのショックで失語症に掛かり、2年間は口を開かず、閉じ籠っていた。

そんなミュを見て、龍義はユニオン軍に入る事を決断した。

今は事故のショックを引き摺りながらも、元気な性格に戻り、施設で暮らしている。

龍義は母親も日本人であるが、ミュの母親はフランス人であり、赤い髪は母親譲りである。

因みに、母親の旧姓は『コーラサワー』である。

第1話で龍義が『コーラサワー』で思い出そうとした人物である。

坂田鐘時の紹介

坂田さかた鐘時かねとき

性別、男

誕生日、6月26日

年齢、22歳

髪の色、青（実際の色は栗色）

髪型、ボサボサなショートヘア

瞳の色、ピンク（実際の色は茶色）

身長、180？

出身地、日本

階級、少尉

性格はとにかくイタい上にウザい。
常にイヤな笑顔を浮かべ、語尾に『wwww』が付く。

こんな性格になったのは、物心がついた辺りで『某大型掲示板』を見てからであり、暇さえあれば、その某掲示板に書き込みをしたりする。

口癖は『うはっ（wwww）』。

驚いた時は『うえ（wwww）』になる。

ただ、変に空気が読める為、シリアスな時や本当に危険な時、本気を出す時やキレた時には普通の口調になるが、龍義曰く、鐘時がキ

した所を見たことはほぼ無いという。

龍義とミユとは家が隣同士で、小学、中学の先輩である為、昔から仲は良い。

女性の体型は所謂『ボン・キュ・ボン』が好みであり、しかも無駄に熱く語ったりする。

が、所謂ロリ体型でもイケない事はないそうだ。

パイロットとしては優秀で、龍義の次に実力があり、近い内にフラッグを授与される予定である。

坂田鐘時の紹介（後書き）

名前？ 銀さんのパクリだよ
W W W W W W

第2話 ガンダム(前書き)

龍義はMSWADに所属する事になったが…

第2話 ガンダム

ユニオン基地

龍義「…今日でこの基地ともお別れか…」

龍義は自室の荷物を片付けながらそう言った。

その後、グラハムに『やはり少尉の実力は本物のようだ。だから私の推薦としてMSWARDに入ってもらおう。何、あの模擬戦のデータが有れば誰だつて入れてもらえる。』という、まるで何もかもがグラハムの掌の上で動かされているような感じだった。

龍義「…だが、こうなった以上、腹括ってグラハムの下に行くか。」

龍義は胸のペンダントを開け、ペンダントの中にある心優の写真を見た。

龍義「悪いな、心優。これから忙しくなりそうだ。」

龍義はペンダントを閉じ、荷物を持って自室から出た。

鐘時「ういッスwwwwww」

自室の前には鐘時がいた。

龍義「鐘時か。」

鐘時「……………」
龍義「？」

鐘時は無言で龍義の肩に手を置いた。

鐘時「…MSWARDに行っても、頑張れよ。」

その鐘時の口調は、何時もの訳の分からない口調ではなく、至って普通の、真面目な口調だった。

龍義「…フツ、言われずともなっ！」

鐘時「ぐはっ?!」

龍義は右手で思いつきり顔面パンチをかました。

鐘時「ちよっ?! WWWW 何すんだし WWWW」

龍義「…義手の右手で殴られて、鼻血だけで済むのはお前だけだな。」

鐘時「鼻血ブーツ WWWW」

龍義「…何年一緒にいようが、俺にはお前が分からな…いや、分かりたくないな…」

龍義はそう言ってその場から去った。

輸送機

龍義「セイロン島にCBが？」

輸送機でフラッグと共にMSWAD基地に向かっていた龍義はそこでセイロン島の紛争にCBが武力介入を行った事を聞いた。

龍義「まあ、あんなことを言っつて、何もしてなかったらそれはそれで可笑的い……は？ 中尉がセイロン島に？……何やってんですか……あの人は……」

何だかんだで輸送機はMSWAD基地に着いた。

MSWAD基地

龍義「飛鳥龍義少尉、只今来ました！」

「うむ、よく来てくれた。……が、突然で申し訳ないが、エーカー中尉を追っつてきてくれたまえ。」

龍義「はっ！」

「君の活躍はよく聞いているよ。模擬戦で中尉と相打ちになったのだろ？」

龍義「はい。」

「しかし……僅か1年でフラッグファイターの称号を手にするとは……やはり『彼ら』の血を受け継ぐ者の力だろうか……」

龍義「……パイロットとしての腕が良かっただけです。」

「そうか。補給が済み次第、出撃してくれ。」

龍義「了解しました！」

龍義「…ハア…何がどうなっているのやら。」

龍義のフラッグはMSWA D基地から飛び立ち、セイロン島に向かっていった。

龍義「…フラッグ、自動操縦に入る。」

龍義はフラッグを自動操縦に切り替えた。

龍義「『此方』も補給するか。」

龍義はそう言って右肩を持ち

パシユ！

龍義「クツ…！」

龍義は義手の人工神経を切り離れた時に来る痛み顔に顔を歪めた。

龍義「……………」

龍義は義手を取り外し、次に義手の人工神経や人工筋肉を維持する為のナノマシンが入った細長いカプセルを取り出し、それを肩にある義手の取り付け口にあるナノマシンタンクに挿入した。

龍義「……………」

カプセルの中にあるナノマシンを全てタンクに注入し、義手を取り付けた。

龍義「クツ…う…！」

龍義は人工神経が接続する時に走る痛みで顔を歪めた。

龍義は義手を着けてからずっと、この痛みで『過去』を見てきた。そう、『あの時の事故』を…

龍義「ハア…ハア…！ 終わったか…！」

龍義はそのまま仮眠をし、暫しの間、龍義は寝ていた。

ピピッ！

龍義「ッ！」

龍義は警告音に目を覚ました。

龍義「あれは…まさか…！」

龍義はフラッグと戦闘をしているエクシアを発見した。

龍義「ガンダム！」

フラッグはエクシアの肩を掴み、そのままもぎ取ろうとしたが、エクシアはそれを振りほどき、更にフラッグのリニアライフルをGN

ビームサーベルで破壊した。

龍義「隙あり！」

龍義はその一瞬の隙を突き、リニアライフルで攻撃した。

「！」

だが、エクシアはギリギリの所で攻撃を躲し、更に龍義のフラッグに接近し、GNソードを振りかざした。

龍義「ッ！」

龍義のフラッグは咄嗟にソニックブレイドを引き出し、プラズマソードにし、エクシアのGNソードを防いだ。

龍義「ぐっ！？」

だが、龍義のフラッグは吹っ飛んだ。

龍義「なっ…なんだあのパワーは?!」

龍義が驚愕している隙にエクシアは遙か彼方に消えていった。

龍義「フラッグよりも機体が多少太いだけなのに何なんだ…あのパワーは…」

龍義は啞然とした表情で緑色の光となったエクシアを見つめた。

龍義「あれが…ガンダムのか…」

『 援護を感謝する。 』

龍義「…あ、中尉。」

グラハム「ほう、少尉か。」

龍義「問題行為ですよ。勝手に人革領に入っては。」

グラハム「フツ、熟知している。」

龍義「…ガンダムですか。」

グラハム「そうだ。では、戻るぞ。」

龍義「……………」

グラハムのフラッグと龍義のフラッグは輸送機に戻った。

輸送機

ビリー「まさか少尉が来てくれるとはね。」

龍義「まさかガンダムと一瞬とはいえ、戦闘になるとは思いもしませんでした。」

ビリー「ハハッ、これで一層有名人になると思うよ?」

龍義「まあ……」

ビリー「それにしても、本当に予測不能な人だよ君は。」

ビリーはグラハムを見て、そう言った。

グラハム「ライフルを失った。始末書ものだな……」

ビリー「その心配はない。今回の戦闘で得られたガンダムのデータはフラッグ1機を失ったとしてもお釣りが来る。接触時に付着した

塗料から足取りを掴めるかも知れないしねえ。」

龍義「(何だろう…この帳消し感は…)」

グラハム「それにしても若かったな…CBのパイロットは。」

ビリー「話したのかい？」

グラハム「まさか。MSの動きに、感情が乗っていたのさ。」

ビリー「ふっ…」

龍義「そこまで…」

「ガンダム、ロストしました。」

グラハム「フラれたな。」

龍義「そのまま転進して此方がやられるよりはマシです。」

グラハム「だな。」

輸送機はユニオン本国に向かって飛んで行った。

龍義「(しかし…ガンダムと交戦した事以外で俺が来た意味が無いな…これじゃ……)」

MSWAD基地

「…ハア…このガンダムとの戦闘データと塗料で帳消しにしてやる…」

龍義「(やっぱりか!)」

「少尉には悪いことをしたな。」

龍義「…あ、いえ、一瞬だったとはいえ、ガンダムと交戦出来たのは光栄です。」

「そうか。…しかし、A E Uの新鋭器視察の筈が、とんでもない事になってしまったな。」

グラハム「あのような機体が存在しているとは想像もしていませんでした。」

ビリー「研究する価値があると思いますが…」

「上もそう思っているようだ。」

「ガンダムを目撃した君達3人に転属命令が下りた。」

上司は資料を取り出し、3人に渡した。

グラハム「対ガンダム…調査隊…ですか。」

「新設の部隊だ。正式名は追って司令部が付けてくれるだろう。…

少尉には悪いが、度々の転属になった。」

龍義「いえ、ガンダムを目撃し、更に交戦までしてしまえば、そうなるのは必然でしょう。」

「そうか。すまないな。」

ビリー「レイフ・エイフマン教授…技術主任を担当するんですか？」
龍義「フラッグの開発者…！」

「上はそれだけ事態を重く見ているという事だ。早急に対応しろ。」

グラハム「はっ！ グラハム・エーカー中尉、飛鳥龍義少尉、ビリー・カタギリ技術顧問、対ガンダム調査隊への転属、受領致しました。」

こうして、グラハム、龍義、ビリーは対ガンダム調査隊に転属する事になった。

ビリー「驚いたな…君はこうなると予見していたのかい？」

グラハム「私もそこまで万能ではないよ。因縁めいたものを感じてはいるがね。それよりも、私よりも一步万能に近い者がいるがな。」

グラハムはそう言っつて龍義を見た。

龍義「…今更ですけどやっぱり外れて欲しかったですよ…」

グラハム「フツ、だが、『今更』だな。」

龍義「ええ、今更ですね。…過ぎた事は…過去は変えられませんからね…」

グラハム「だが、私達は『^{いま}現在』を生きている。未来に向かつてな。」

龍義「…過去に囚われたままでは、未来どころか今すら見えなくなりますからね。」

グラハム「だな。」

格納庫

ビリー「機体の受けた衝撃度から見てガンダムの出力はフラッグの6倍はあると思うよ。どんなモーター積んでるんだか…！」

グラハム「出力もそうだが、あの機動性だ。」

ビリー「戦闘データで確認したよ。やはりあの機動性を実現させているのは…」

龍義「あの粒子、ですね。」

ビリー「そう、あのガンダムから出る粒子のような物だよ。どうや

「あの粒子には非常に高いステルス性を持っているみたいだ。」
グラハム「あの特殊粒子はステルス性の他に、機体制御にも使われている。」

「恐らくは火器にも転用されているじゃろつて。」

一人の老人が龍義達の所に歩いてきた。

ビリー「レイフ・エイフマン教授！」

龍義「！この人が：！」

エイフマン「恐ろしい男じゃ。わしらより何十年も先の技術を持っておる。」

龍義「恐ろしい男：イオリア・シュヘンベルグですか：」

グラハム「名は聞いた事はあるな。太陽光発電システムの提唱者だったな。」

ビリー「しかし、イオリアは2世紀も前の人間：」

龍義「だけど、イオリアはC Bの創設者かも知れないし、違つかも知れない。：まあ、イオリアとC Bには少なくとも何らかの繋がりはあるのは否定できない。」

ビリー「なら、あのガンダムもイオリアが：」

龍義「もしかしたら、『ガンダムそのもの』はこの時代の技術で造られているのかも知れない。なら、あの粒子が鍵になるのかも知れない。」

エイフマン「ふむ、それは興味深いな。」

龍義「それは：どうも：」

エイフマン「出来る事なら捕獲したいものじゃ。ガンダムという機体を：」

グラハム「同感です。その為にも、この機体をチューンして頂きたい。」

エイフマン「パイロットへの負担は？」

グラハム「無視して頂いて結構。但し、期限は1週間をお願いした

い。」

エイフマン「ほう…無茶を言う男じゃ。」

グラハム「多少強引でなければガンダムは口説けません。」

カタギリ「彼、メロメロなんですよ。」

ピピッ

グラハムの電話が鳴り、グラハムは電話に出た。

グラハム「私だ。…何！？ ガンダムが出た！？」

龍義「何?!」

グラハム「場所は?…ふむ…2ヶ所？」

龍義「同時行動か。」

グラハム「それで、場所は?…南アフリカとタリビア?! 分かった。」

龍義「中尉!？」

グラハムは電話を切り、フラッグに乗り込もうとした。

エイフマン「止めておけ。」

だが、それをエイフマンは止めた。

グラハム「何故です!? 1機はタリビアです。ここからなら行ける…!」

エイフマン「ワシは麻薬などというものが心底嫌いだな。焼き払ってくれるというならガンダムを支持したい。」

グラハム「麻薬…?」

エイフマン「奴らは紛争の原因を断ち切る気じゃ。」

龍義「自分も、麻薬は嫌いですね。アレは人を人ではなくす物です。」

麻酔とかに使われている物以外は全てこの世から消えてほしいものです。」

エイフマン「うむ、そうじゃな。」

龍義「後：確か、南アフリカには鉱物資源の採掘権を発端とした内戦がありましたよね？」

ビリー「まさか、CBはその内戦への武力干渉を…？」

龍義「当たり前でしょう？ CBは全ての戦争に武力介入すると言ってきたのですから。」

エイフマン「確かにな。……それにしても……」

エイフマンは龍義を見た。

エイフマン「飛鳥か…。君の父親の『大輝』とその弟の『玲真』まことは有能なパイロットじゃった。」

龍義「そうですか。」

エイフマン「もし生きていれば、有能なフラッグファイターになれるのじゃろうに……」

龍義「……………」

龍義は脳裏に『あの事故』の事を思い出した。

『燃え盛る車』、『瓦礫に埋もれた龍義自身』、そして

龍義「…過去を悔やんだ所で、戻ってくるものなど、ありはしませんから。」

エイフマン「確かにな。」

龍義「それに……」

龍義は左手をサムズアップの形にし、親指を自分の心臓の辺りに突き付けた。

龍義「飛鳥の血を引く者がここにいますから。」

エイフマン「フツ、そうじゃったな。…さて、フラッグのチューンをせねばな。」

ビリー「はい！」

エイフマンとビリーはフラッグのチューンの準備に取り掛かった。

グラハム「…フツ、これからだな。」

龍義「ガンダムとの戦い…」

グラハム「その為にも、一層の精進をしなければな。」

龍義「はい。」

グラハムと龍義はガンダムとの戦いを思った。

第3話 対外折衝（前書き）

もうタイトル通りとしか…

第3話 対外折衝

日本

ミュ「　　」

ミュは買い物袋を抱えて施設に帰っていた。

ミュ「…龍兄…」

ミュは空を見上げた。

ミュ「さてと、帰ろっと！」

ミュは前を向いて歩き出そうとした。

ドカツ！

ミュ「キャッ!？」

ミュは何者かとぶつかり、倒れてしまった。

ミュ「イタタタタタ…！」

「すまなかった。大丈夫か？」

声からして、男がミュに手を差し伸べた。

ミュ「あ…はい…」

ミュはその男の手を取り、立ち上がった。

ミュ「あ…」

ミュはその男の顔を見た。

その男はミュよりかは年上だが、少年で、更に顔付きは日本人のそれではなく、どちらかという中東の人の様であった。

「大丈夫か？」

ミュ「あ、はい。」

「そうか。」

そう言って男　少年は立ち去ってしまった。

ミュ「…何なんだろう…?」

ミュはその少年に少し疑問を抱きつつ、施設への帰路についた。

アメリカ

MSWAD基地

格納庫

龍義「これが…」

龍義達は黒いフラッグを見上げていた。

エイフマン「バックパックと各関節の強化、機体表面の対ビームコーティング、武装はアイリス社が試作した新型のライフルを取り寄せた。」

グラハム「壮観です…！プロフェッサー。」

龍義「たった1週間でここまで…」

ビリー「その代わり、対Gシステムを稼働させても、全速回転時には12Gも掛かるけどねえ。」

龍義「12Gも…」

龍義はもしこの黒いフラッグ フラッグカスタムを操縦する時、果たしてそんな馬鹿げたGに耐えられるのかを思っていた。

グラハム「臨むところだ、と言わせてもらおう。」

グラハムは強気な表情でビリーを見ていた。

龍義「(……………)」

龍義はここ1週間での出来事を思い出した。

龍義「(北アイルランドのテロ組織リアルIRAの武力によるテロ行為の完全凍結の発表。これはCBの介入を恐れての発表だが、これは彼らにガンダムに対抗出来る戦力を保有してない事にもなる。)

だが、CBがいなくなれば、また活動を再開する可能性もある。：
なら、CBの活動に終わりなど無い。なにせ、『全ての戦争、紛争
の根絶』を掲げているからな。」

と、そこに二人の男が此方に向かってきた。

「ほう…！これが中尉のフラッグですか。」

龍義「あなた達は…」

「ハワード・メイスン准尉、ダリル・ダッジ総長、グラハム・エー
カー中尉の要請により、対ガンダム調査隊に着任しました。」

グラハム「来たな。歓迎しよう、フラッグファイター！」

こうして、ハワードとダリルが新たに対ガンダム調査隊に加わった。

ハワード「まさか君がああ噂の期待の大型ルーキーの飛鳥龍義少尉
とは。」

龍義「はい。」

ダリル「成る程な、軍はそれだけガンダムを重要視しているという
事か。」

龍義「ですね。」

グラハム「だが、ガンダムは何時何処に現れるのかわからんな。」

龍義「ただ、言えるのは、紛争ある所にガンダムは現れるという事
だけですな。」

グラハム「だな。」

ピピッ

グラハム「私だ。」

グラハムは電話に出た。

グラハム「……………何？ タリビアが？」

龍義「タリビア？」

龍義達は『タリビア』という言葉に少し身構えた。

ダリル「タリビアってまさか……」

ハワード「ガンダムの襲撃を受けた所じゃないか。」

龍義「いや、それだけじゃない。」

ハワード「えっ？」

グラハム「……………ああ、分かった。」

グラハムは電話を切った。

グラハム「タリビアが明日、声明を発表するという情報が入った。」

二人「！！」

龍義「タリビアか……」

グラハム「恐らくはユニオンからの撤退を発表する気だな。…まあ、明日になれば分かるさ。」

龍義「……………」

翌日

グラハムの予想通り、タリビア政府は、軌道エレベーターの電力供給を巡って、ユニオンからの脱退を発表した。

ハワード「遂にガンダムとご対面ですか。楽しみですよ中尉。」

グラハム「私もだ。さて、このカスタムフラッグが何処までガンダムに対抗出来るか…いや、そうする必要があると見た。」

龍義「カスタムフラッグでガンダムにある程度でも通用すれば、最低でもこの隊のフラッグもカスタム仕様出来る可能性はありますね。…まあ、リミッターは付けられますけどね。」

グラハム「フツ、そうだな。では、全員、出撃準備だ。」
3人「了解！」

龍義らは出撃準備をした。

米軍はタリビア周辺を包囲していた。

龍義「どう出る？ C B。」

対ガンダム調査隊の面々は、本隊から離れた所を飛んでいた。

ピピッ！

龍義「！」

グラハム「フツ、来たか！」

タリビアに現れたエクシア、ガンダムデュナメス、ガンダムキュリオスは、タリビア軍に攻撃を仕掛けた。

ダリル「此方ではなくタリビア軍を?!」

龍義「いや、CBはタリビアを紛争幫助国と断定した。」

ダリル「!」

龍義「そして、次にタリビアはユニオンに脱退を止めて救援を求めらる。」

ダリル「どういう事だ…?」

龍義「今に分かります。」

ピピッ!

『これより、我が軍はタリビア防衛の為、ガンダムに攻撃を開始する。』

ハワード「!?!」

ダリル「何だと!?!」

龍義「…やはりというか…いや、やはりか。」

ピピッ!

『ガンダム、撤退を開始。』

龍義「(…恐らく、CBはこんな茶番劇になる事は先刻承知の筈だ。…それでも、CBは武力介入を行う。自らの掲げた『戦争根絶』の為に…)」

ピピッ

フラッグカスタムが行動を開始した。

龍義「ガンダムか。」

龍義のフラッグ達はカスタムフラッグの後を追った。だが、カスタムフラッグはフラッグの2倍以上のスピードで遠ざかって行った。

龍義「速い！ 流石はカスタムフラッグ！」

龍義のフラッグ達も負けじと最大スピードで飛んだ。

龍義「！ あれは…！」

龍義はカスタムフラッグの攻撃を受けているエクシアを見付けた。エクシアはカスタムフラッグの攻撃を受け、海に落ちた。

龍義「(落ちた！？…いや、あれは…)」

ハワード「お見事です、中尉。」

グラハム「逃げられたよ。」

龍義「(やはり…か。)」

グラハム「カスタムフラッグ…一応対抗して見せたが…しかし、水中行動すら可能とは…汎用性が高過ぎるぞ、ガンダム…！」

龍義「人形である以上、ある程度の空気や水の抵抗を受けている可能性はありますけど、あのガンダムは宇宙そらから降りてきた。そう考えると、ガンダムは全領域を活動可能かと。」

グラハム「成る程、そうか。他のガンダムも撤退した様だ。全機、撤退するぞ。」

3人「了解！」

ガンダム調査隊は撤退した。

龍義「（C Bはガンダムという力で一体何をなす？ 宣言通り戦争根絶の為か。それとも、戦争根絶を盾にした『全く別の目的』か？ …… それを知るのは、イオリア・シュヘンベルグのみ… か。」

第4話 限界離脱領域、セブンスード、報われぬ魂（前書き）

『限界離脱領域』の所はほぼ速攻で終了する上に、『セブンスード』と『報われぬ魂』の所はただ立ち見しかない…

まあ、ユニオン視点での原作通りの流れだから仕方無いが…

とはいえ、最後の辺りでミユちゃんにはちょっとトラウマを呼び覚ましてみるけどね

第4話 限界離脱領域、セブンスード、報われぬ魂

龍義は携帯のテレビ電話でミュと会話をしていた。

龍義「ミュ、そっちはどうだ？」

ミュ『うん、元気にやってるよ。』

龍義「そうか。」

ミュ「龍兄はどう？」

龍義「俺か？ 俺も元気にやってるよ。」

ミュ「そうなんだ。…あ、ところで鐘時さんは？」

龍義「鐘時…？ いや、すれ違ってばかりだからな…あれ以来会って無いな。」

ミュ「ダメだよ？ 一応先輩なんだから、連絡ぐらいしなきゃ。」

龍義「（一応ってお前…）ああ、そうするよ。…そろそろ時間だから、またな。」

ミュ「うん！」

龍義は携帯のテレビ電話を切った。

龍義「……………」

ガンダム調査隊は宛もなく飛んでいた。

龍義「…ただ意味もなく飛んでいる…か…。ユニオンはタリビアの件によって安泰、人革連と中東、アフリカは所々で紛争が散発している以外はそこまで紛争は起きてはない…か…」

そうして、そのまま飛んでいた。

ピピッ！

龍義「！」

軍から通信が送られてきた。

龍義「なんだ？……………なっ？！」

龍義はその通信の内容を見て、驚愕した。

龍義「『人革連の天柱で低軌道ステーションの重力ブロックが分離地球に向かって落下。』…何だと！？」

グラム「軍がわざわざ此方に連絡を送るという事は、ガンダムか。」

ピピッ！

ハワード「次の通信が…」

龍義「『尚、分離した重力ブロックは、ガンダムによって地球への落下は防いだ模様。』……………はっ？」

龍義はその通信の内容に拍子抜けた。

ダリル「どういう事だ？」

ハワード「ガンダムが人命救助を行ったとも取れるが…？」
龍義「…ガンダムのパイロットに聞いてください。…まあ、言え
るとしたら、このガンダムによる人命救助は、『極めて私的な感情』
によるものか…」

龍義は最後にそう呟いた。

1週間後

龍義「…モラリア共和国大統領がA E U主要3ヶ国の外相と極秘裏
に会談を行っている？」

グラハム「ああ、そうらしいな。」

龍義「という事は、モラリアとC Bが事を構えるつもりですか？」

グラハム「フ、そうとしか思えんな。」

龍義「ここまでモラリアが強気なのは、A E Uが後ろ楯になったか
らか…」

ビリー「その通りだよ。太陽光発電システムを完成させてコロニー
開発に乗り出す為には民間軍事会社の人材と技術が不可欠だからね。
モラリアとしても縮小した経済を立て直したいという思惑がある。
例え自国が戦場になったとしてもA E Uの援助が必要なのだ。それ
に、あわよくば手に入れようと考えてるんじゃないかな…ガンダム
を。」

グラハム「ふん…なら、今回は譲るしかないようだな。A E Uの工
ースとやらに。」

龍義「A E Uのエース…」

モラリア空軍基地

コーラサワー「イイーヤッツホオオオーウウウツツ!!!」

滑走路にコーラサワーの駆るイナクト指揮官機が着陸した。

コーラサワー「よう！ AEUのエース、パトリック・コーラサワーだ！ 助太刀するぜ、モラリア空軍の諸君！」

「な…何て奴だ…」

コーラサワー「早く来いよガンダム！ ギッタギッタにしてやっからよお!!!」

龍義「……………」

龍義はパソコンでモラリアに関する情報を捜していた。

龍義「モラリア共和国…23年前の2284年に建国したヨーロッパ南部に位置する小国。人口は18万と少ないが、300万を超える外国人労働者が国内に在住。約4000社ある民間企業の2割がPMC。PMCとは傭兵の派遣、兵士の育成、兵器輸送及び兵器開

発、軍隊維持それらをビジネスで請け負う民間軍事会社。か…」

龍義は椅子の背もたれに背中を預けた。

龍義「…何故、CBは誘致した民間軍事会社を優遇して発展してきたモラリアを今まで攻撃対象にしなかった…？ いや、世界の戦争が縮小していけば奴等のビジネスは成り立たなくなる。そして、そのまま自滅するのを待っていた。だが、AEUがモラリアに救済を行っただからか…」

龍義の顔に陰しさが出ていた。

龍義「チツ、戦争を糧にしている奴等など…！」

ただ一人の家族であるミユを守る為に軍に入った龍義にとって、戦争を糧にしている（龍義は全ての傭兵がそうではないのは分かっている）傭兵の様な存在に嫌悪感を抱いているのだ。

無論、全ての傭兵がそうではないのは分かっている。

だが、そのイメージがどうしても拭いきれないのだ。

だが、PMCにはその龍義の傭兵のイメージを最悪レベルに具現化している男がいるのだが…

「正午になりました。JNNニューストゥデイ、本日の特集はモラリア共和国で行われたAEUとの合同軍事演習のオペレーション・ドーンについて検証していきます。双方合わせてMSが100機以上も投入されて行われた演習ですが、何故この時期に大規模な軍事

演習を行う必要があるのでしょうか…」

龍義「CBとの全面対決の為。」

グラハム「だな。飲むか？」

グラハムはコーヒー缶を龍義に渡した。

龍義「ありがとうございます。」

龍義はそのコーヒー缶を受け取り、口を開けた。

グラハム「例え4対100以上でも、ガンダムが勝つ可能性はあるか？」

龍義「もし、新装備がガンダムに導入されれば、そのたった4に更に軍配が上がる可能性が高くなります。」

グラハム「フツ、新型機の可能性は考えないのか？」

龍義「CBは、『現状』では4機のガンダムで十分だと思っ
ていますね。」

グラハム「うむ、あの様な性能なら、十分だな。」

龍義「さて、CBはどうですか、ですね。」

グラハム「ああ。」

翌日

AEUとモラリア軍による合同軍事演習、オペレーション・ドーンが開始された。

エイフマン「そうか、クジヨウ君と…元気だったかね？」
ビリー「ええ。」

エイフマン「あの事件の事は？」

ビリー「忘れた…と、言っていました。」

エイフマン「そうか。」

グラハム「（クジヨウ…もしかあの事件の戦況予報士か？）」

龍義「（クジヨウ…？ リーサ・クジヨウ…？ 確か、カティ・マ
ネキンと並ぶAEUの『元』戦術予報士だった筈…）」

「現場からの映像届きました。モニター出ます。」

モニターにはモラリア空軍基地に向かう4機のガンダムが映った。

ハワード「何だ？ あの装備は？」

ダリル「資料にねえぞ？」

エクシアとデユナメスには、見慣れぬ武装（GNロングブレイド、
GNショートブレイド、GNフルシールド）が装備されていた。

龍義「やはり、か。」

グラハム「CB…本気と見た！」

そして、CBのガンダムによる、オペレーション・ドーンに対する
武力介入が始まった。

グラハム「ほう…！」

龍義「…ッ！」

ハワード「なっ…?!」

ダリル「コイツは…！」

龍義達は圧倒的な力をまざまざと見せ付けるガンダムに目を釘付けにしていた。

コーラサワー「なんじゃそりゃあああああ!!!!」

グラハム「フツ、圧倒的だな。」

龍義「あの中に入りたいと思います?」

グラハム「フツ、愚問だな。」

龍義「そうですか。…あつ!」

龍義はエクシアに接近する『青いイナクト』を見付けた。

龍義「なんだ? あの青いイナクトは?」

グラハム「ほう、良い動きだ。」

龍義「だけど、あのカラーリングは…」

グラハム「PMCの機体か。」

龍義「(あのイナクトのパイロットの腕がいいのか、ガンダムのパイロットが未熟なのか…いや、その両方か…?)」

その青いイナクトはエクシアを格闘戦で圧倒していた。

そして、エクシアが新型の武装(GNブレイド)で青いイナクトのブレイドライフルを受け止めた時だった。

龍義「(何だ…? 胸部の辺りが光って…) ツ! 武器が?!」
グラハム「なんと!」

エクシアのGNブレイドは、青いイナクトのブレイドライフルを斬り落とした。

パチッ!

グラハム「むっ?」

龍義「はっ?」

そこで突然モニターの画面が消え、次に画面が現れた時には、他のガンダムが映し出された。

龍義「…流れ弾…?」

グラハム「…らしいな…」

そして、ガンダム4機により、モラリア空軍基地は壊滅的なダメージを受け、ガンダムは何処かに消えた。

ダリル「ガンダムは何処に行った?」

ハワード「撤退した…?」

グラハム「いや、次のミッションに向かったのだろう。」

龍義「(次のミッション…モラリア軍…PMC…) ハッ! ガンダムはPMC本部を狙う気だ!」

ダリル「何?!」

龍義「恐らくガンダムは自身の電波障害を利用して何処か渓谷の様な所を通ってPMC本部に向かっている筈です。」

グラハム「成る程、相手は電波障害が起きてる所にガンダムがいる

「 と思い、攻撃を仕掛ける。だが、ガンダムは既に其処にはいないと。」

龍義「はい。」

ビリー「PMC本部周辺の地形データを出すね。」

ビリーはPMC本部周辺の地形データをモニターに映した。

ハワード「あっ!」

ダリル「こいつは!」

PMC本部の付近には確かに溪谷があったのだ。

龍義「ガンダムはPMC本部を直接叩く気だ。」

そして、龍義の読み通り、ガンダムは溪谷を通過してPMC本部を襲撃し、多数のMSを撃破。

PMCは無条件降伏をし、ガンダムによる武力介入は終了した。

龍義「……………」

エイフマン「終わったようだな。」

ビリー「あっ…」

グラハム「どうやらAEUは賭けに負けたようです。」

ビリー「それはどうかな。確かに20機以上のMSを失ったのは痛いけど、これでAEUは国民感情に後押しされて軍備増強路線を邁進する事になると思うよ。モリアに貸しを作った事でPMCとの連携も、より密接になるだろうしね。」

グラハム「……………」

エイフマン「悲しいな。どんな華やかな勝利を得ようと、CBは世界から除外される運命にある。」

グラハム「プロフェッサーは彼らが滅びの道を歩んでいるとお考え

ですか？」
エイフマン「まるで、それを求めているかのような行動じゃ。少なくともワシにはそう見える。」
龍義「自ら滅びを求める、か…。だが、それでもCBはその歩みを止める事はない…。その先に滅びしかなくとも、『戦争根絶』の為に戦い続ける。それが、CBの掲げた理念、なのだから…。」

龍義は自室でニュースを見ていた。

『まず最初は、昨日モラリア共和国で起こったモラリア軍とAEUの合同軍事演習に対するCBによる武力介入についてのニュースです。非常事態宣言から無条件降伏までの時間は僅か5時間余りでした…』

龍義「そういうと結構長かったな…。いや、たったの4機にほぼ一方的に蹂躪されただけか…。」

「現時点での戦死者は兵士、民間人を含めて527名で行方不明者の数を含めると犠牲者はまだまだ増えると予想されます。」

龍義「これが…CBが犯した罪か…。」

「只今、現地入りした池田特派員と中継が繋がったようです。現場の状況を伝えて貰いましょう。池田さん、お願いします。」

『あつ、はい。池田です。私は今、モラリアの首都リベールに来了います。見えますか？ここは撃墜されたモラリア軍のMSがビルに激突し、崩壊した現場です。ここに来るまでに流れ弾を受けて破壊された民家を幾つも目撃しました。一般市民にも多数の犠牲者が出ている模様です。』

「私設武装組織CBから犯行声明のようなものは出されていませんか？」

池田「ええ、そのような情報は私の所には入って来ていません。」
龍義「ある訳無いだろ。」

龍義は呆れた様な表情でそう言い放ち、コーヒー缶の口を開けた。

龍義「あのイオリア・シュヘンベルグの演説が唯一無二にして最大の犯行声明だからな。」

龍義はそう言っただけで開けたコーヒー缶を飲んだ。

日本

ミュは施設の子と一緒に買い物に出掛けていた。

「そういえば、ミュちゃんのお兄さんって軍人だよな？」

ミュ「うん、そうだけど？」

「もし、ガンダムと戦って死んじゃったら、とか思わないの？」

ミュ「思わないよ。」

「どうして？」

ミュ「だって、龍兄が軍人になったのは私を守る為だから。もし、ガンダムと戦っても、絶対に死なないから。」

「（凄い自信…）」

その子はミュの話に呆れた様な表情をした。

「ふふつ。まずは洋服を見て、洋服を見て、洋服を見て、洋服を見る」

「皆自分のでしょ。」

「ふふつ。」

ミュ達はそんな会話をするカップルの側を通り抜けた時だった。

ドガアアアアアアンツッ!!!

二人「キャッ!!!」

突如背後から爆発が起き、ミュ達は思わずしゃがんだ。

「何だ…？ バスが…！」

ミュ「えっ…？」

先程のカップルの男がそう言い、ミュは思わず後ろを向いた。

ミュ「あっ…！」

其処には、爆発したバスと、爆発に巻き込まれた人々が倒れていた。

「バスが爆発したぞ！」

「テロや！ これはテロやで！」

「て…テロ?!」

施設の子はその通行人の男の言葉に怯えた様な表情をした。

「み…ミュちゃん！ 早く此処から離れよ!？」

「ミュ」……………」

施設の子はミュの腕を掴んだが、当のミュは目を大きく開き、口は半開きのまま、動こうとしなかった。

「…ミュちゃん…?」

ミュ「……………あ…ああ……………」

「…?」

「君達も早く此処から離れた方がいいよ。」

カップルの男がミュ達に近付いた。

ミュ「あ…ああ…あ…」

「…?」

カップルの男もミュの様子が可笑しい事に気付いた。

ミュ「ああ…ああああ…!」

ミュは燃え上がるバスを見て、『フラッシュバック』を起こしたのだ。

ミュ「ああああ…」

それは、トンネル内で荷台に置いてある（軌道エレベーターの）資材を派手にばら蒔きながら複数の自動車を巻き込みながら横転し、燃え上がるトラック。

その光景を頭から血を流しながら啞然と座り込んで見る幼いミュと、バイクをまるで乗り捨てたかのように横倒しにし、同じように啞然と見る今よりも若い鐘時。

そして、瓦礫の中から『這い出てきた』のは

ミュ「あああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ！！！」

ミュは頭を両手で抱え込み、発狂したかのように叫び、気を失って
その場で倒れ込んだ。

「み…ミュちゃん！？」

「と…とにかく此処から離れよう！」

カップルの男がミュをその場から離れた。

「ミュちゃん…」

施設の子はミュの急変した原因がバスの周りで倒れている人達だ
と思っただ。

だが、ミュが急変した原因は燃え上がるバスにある事には気付いて
などいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4515x/>

機動戦士ガンダム00 DESTINY外伝 『義翼の鳥』

2011年12月18日05時50分発行